

彫刻表現による素材の再考察

— 学生主体による展覧会の企画から開催まで —

Reconsideration of Materials by Sculptural Expression: From Student-Centered Exhibition Planning to Holding

浜田 周
HAMADA Shu

1. はじめに

近年の彫刻表現において、多種多様な素材を複合的に用いた表現が多くなっている。日本の大学教育において、いわゆる彫刻素材は「彫刻」の文字通り彫って刻む石や木に加え粘土と、近現代に入り金属素材が加わり、石・木・粘土・金属の4素材を中心に行われてきた。しかし現在はその今までの素材に加え、映像やパフォーマンス、写真や文章、既製品や廃棄物など彫刻表現の素材は際限が無いと言ってよいほどに多岐に渡り、これまでの枠を超えた表現となっている。彫刻表現において“素材”が重要なファクターであることは論ずるまでもない。

そこで、素材が氾濫するなか、本学彫刻専攻大学院生を対象に、彫刻表現において“素材とは何か”、彫刻と素材の関係性を再考察し、制作をする上での素材のあり方を研究する目的のもと、平成29年度より令和3年度の5年間の奨励研究において1年度に一回、計5回の展覧会を行った。企画から開催までを学生主体で行う展覧会を企画し、自由な素材を用いた彫刻表現の可能性を模索すると共に、素材に対する意識の向上及び展覧会にて作品を発表する際の効果としてより客観的な視点で自作を省みる必要性や鑑賞者の反応など、作品を他者に見せる意義を参加学生が実践を通して考察することを目的とした教育研究である。

また、展覧会開催において作品制作指導を含めサポート及び助言をとおして、教員としての指導力向

上の成果をあげられる研究でもある。

2. 概要

本学彫刻専攻の学生が主体になり銀座の現代美術画廊GARELIE SOL（東京都中央区銀座1-5-2西勢ビル6F）にて4名～6名で展覧会を行う。本学大学院生2～3名（平成29年～令和元年、3名・令和2年・3年、2名）を浜田研究室より選抜する。選抜された本学学生と浜田にて、展覧会の主軸となる本研究名の「彫刻表現による素材の再考察」に則した展覧会名を決める。東京芸術大学彫刻科に大学院生2～3名の推薦を依頼（平成29年、木戸修教授：当時、平成30年～令和3年、林武史教授）し、金沢美術工芸大学彫刻専攻と東京芸術大学彫刻科との合同展覧会とする。

この教育研究の最大の目的は、選抜された本学大学院生が展覧会開催にあたって研究主題である「彫刻表現による素材の再考察」に則して決めた展覧会名を決定し、案内状製作や出品者の取りまとめ等の運営から制作、設置までを私の助言のもと学生主体で行い、今後の制作や発表活動を続けていく上での経験値を高め、社会に貢献でき得る作家の育成にある。

3. 開催された展覧会（開催順）

(1)

「素材はいつ彫刻になるのか」

場所：GALERIE SOL 東京都中央区銀座

会期：平成29年11月6日(月)～11月11日(土)

出品者：

金沢美術工芸大学

クニト 博士課程彫刻分野3年

大山日歩 彫刻専攻修士課程2年

大竹祐貴 彫刻専攻修士課程1年

東京芸術大学

内藤早良 彫刻科研究生

松島勇祐 彫刻科修士課程2年

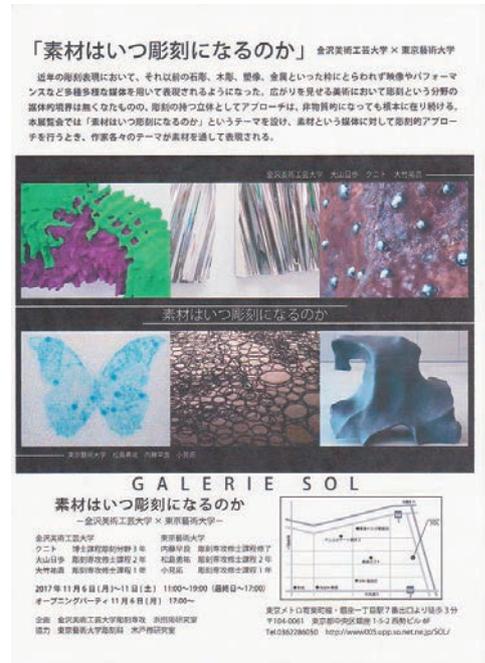
小見 拓 彫刻科修士課程1年

平成29年、第1回は博士課程彫刻分野3年のクニト、彫刻専攻修士課程2年の大山日歩、彫刻専攻修士課程1年の大竹祐貴を選抜した。クニトは発泡スチロールを原型にFRPで形成した作品、大山日歩は、木材や発泡スチロールにビビットな塗装を施した作品、大竹祐貴は金属を中心とした作品を制作している。3名に本研究の内容を伝え、参加の意志を確認した。

この3名が本研究の目的と内容を踏まえ、何度も会議を重ね議論したことにより、本研究にふさわしい展覧会タイトル「素材はいつ彫刻になるのか」が学生より提案があった。これは作り手が、コンセプトから素材選び、制作、発表までのプロセスの中で「素材」が「彫刻」になる時がいつなのか、またその瞬間は作者にとって、どのような意味を持つのかを考察する意義のあるテーマである。

展覧会名を東京芸術大学彫刻科、当時同大学教授の木戸修氏に伝え、大学院生3名の出品依頼をした。金属やアクリル板、岩塩など様々な素材を使用し制作している3名が選ばれ開催となった。

●DM「素材はいつ彫刻になるのか」



●展示風景



大山作品

(2)

「素材に問う」

場所：GALERIE SOL 東京都中央区銀座
 会期：平成30年9月17日(月)～9月22日(土)
 出品者：

金沢美術工芸大学

- 丹羽 啓 彫刻専攻修士課程2年
- 中田龍佑 彫刻専攻修士課程1年
- 服部達也 彫刻専攻修士課程1年

東京芸術大学

- 丸山太郎 博士後期課程彫刻分野1年
- 島田佳樹 彫刻専攻修士課程2年
- 山崎雅子 彫刻専攻修士課程1年

平成30年、第2回目では彫刻専攻修士課程2年の丹羽啓、彫刻専攻修士課程1年の中田龍佑、彫刻専攻修士課程1年の服部達也を選抜した。丹羽啓は、目まぐるしく変動する現代社会においてモノを所有し生産する中で生じるモノとヒトの相互関係や境界、距離について考察し、石の中でも特に固い御影石で身の回りにある工業製品などを忠実に再現している。中田龍佑は、自分の中に生まれては消えていく感情は何が元となっているのか、自分の中に生まれたものが感情になるまでの過程の一部を切り取り、金属を用いて立体化することで表現している。服部達也は、人同士が何らかの関係を持つとき、そこに各々の領域がどう反映されるのか、現代の人々が必要とする間隔をテーマに身の回りにあるもの全てが素材となり作品化する。

この3名に参加の意志を確認し、展覧会名は本研究に沿った意味を持つ「素材に問う」と決定した。このテーマの真意は、作者が素材に何を求め、素材を通して何を表現できるかを自身に問う意味がある。これは鑑賞者にとって作者が何を想って素材を選択し表現の媒体として使用しているかを知る機会となる。

こうして決定された展覧会テーマをこの年度より東京芸術大学彫刻科教授の林武史氏に伝え大学院生3名の出品を依頼した。石材や陶、毛糸を素材に制

作している3名が選ばれ開催となった。

●DM「素材に問う」



●ギャラリートーク及び、林氏による講習会



ギャラリートーク



丹羽作品



林氏による講習

(3)

『「石」「金」「土」-多様な素材の中で-』

場所：GALERIE SOL 東京都中央区銀座
 会期：令和元年10月28日(月)~11月2日(土)
 出品者：

金沢美術工芸大学

- 子孫ちさと 彫刻専攻修士課程2年
- 川野昌通 彫刻専攻修士課程2年
- 村田優太 彫刻専攻修士課程1年

東京芸術大学

- 植松美月 彫刻専攻修士課程2年
- 常見龍太郎 彫刻専攻修士課程1年
- 福島李子 彫刻専攻修士課程1年

令和元年、第3回目は彫刻専攻修士課程2年の子孫ちさと、彫刻専攻修士課程2年の川野昌通、彫刻専攻修士課程1年の村田優太を選抜した。子孫ちさとは、硬い石に柔らかい丸みを持った造形を施し、やさしさの中から安心感を伝える。川野昌通は、金属加工の中で工程が嵌る瞬間や反対に拒絶されるような瞬間を自分の中で選別しながら素材の特性や可能性を見出している。村田優太は、元々形のない土を用いて、世界のモノは常に移ろい日々変化していくことを表現している。

以上の3名に展覧会趣旨を説明し、参加の意思があることを確認した後、議論を重ね、本展覧会名は古くから彫刻素材として用いられている、石、金属、土の3素材に限定し、現代における表現の可能性を模索する『「石」「金」「土」-多様な素材の中で-』とした。

こうして決定された展覧会テーマを令和元年度も東京芸術大学彫刻科教授の林武史氏に伝え、それぞれ石、金属、土を主素材として扱っている大学院生3名の出品を依頼した。それぞれの素抜う両大学の学生が同時に展示することで素材へのアプローチの違いを垣間見ることが期待される展覧会名となった。

●DM『「石」「金」「土」-多様な素材の中で-』



●展示風景



林氏による講評



福島作品

(4)

「彫刻の形成－カタチとなる物質－」

場所：GALERIE SOL 東京都中央区銀座

会期：令和2年10月26日(月)～31日(土)

出品者：

金沢美術工芸大学

藤澤空也 彫刻専攻修士課程1年

山内郁人 彫刻専攻修士課程1年

東京芸術大学

竹野優美 彫刻専攻修士課程1年

山崎良太 彫刻専攻修士課程1年

令和2年、第4回目は彫刻専攻修士課程1年の藤澤空也、彫刻専攻修士課程1年の山内郁人の2名を選抜した。藤澤空也は「人間は見ているものを正しく認識できているのか、主観と客観の間で目しているものは何か」をテーマにしている。山内郁人は「象徴」と「消費」を主題に様々な文脈を持つ素材、造形、モチーフ等を組み合わせ皮肉やユーモアといったメッセージ性を模索している。

以上の2名に展覧会参加の意志があることを確認した。「彫刻」は様々な媒体を通して形成されている。作者がそれぞれの「カタチとなる物質」を選定し意味を込め形成される。これをテーマとし、展覧会名は「彫刻の形成－カタチとなる物質－」と決定した。

こうして決定された展覧会テーマを東京芸術大学彫刻科教授の林武史氏に伝え大学院生2名の出品を依頼した。

この年度から出品者数を減らした理由は、例年通りの6名での展示では出品作品の大きさの違いはあるが一人当たりの空間が銀座GALERIE SOLでの展示において窮屈になり、出品作品も“空間を使う”というより、“面積を均等割りした場所に置けるサイズ”を意識してしまうように感じたためである。結果を述べると、6名から4名に変更したことは出品者の意識がより空間に向くこととなり、非常に効果的であった。

●DM「彫刻の形成－カタチとなる物質－」



●会場風景



ギャラリートーク

搬入風景

(5)

「素材の在り方-それぞれの軌道-」

場所：GALERIE SOL 東京都中央区銀座

会期：令和3年10月25日(月)～30日(土)

出品者：

金沢美術工芸大学

笹井南海 彫刻専攻修士課程1年

多々見草太 彫刻専攻修士課程1年

東京芸術大学

山本佑介 彫刻専攻修士課程2年

大川恵実 彫刻専攻修士課程1年

令和3年、第5回目は彫刻専攻修士課程1年の笹井南海と彫刻専攻修士課程1年の多々見草太を選抜した。笹井南海は、気づきにくい人間の性質や状況をコミカルなポーズをさせた人体彫刻で表現する。粘土原型からFRPや水性樹脂に置き換えペイントを施す。多々見草太は、世間的に少数派であることや神秘的現象や理論を、一般的でない事を理由に否定してしまい、人類発展の停滞や妨げをしているのではないか、これを主題に金属素材を用いて制作している。

以上の2名に展覧会趣旨を説明し参加の意思があることを確認した。テーマの設定は難航したが議論を重ね、「素材の在り方-それぞれの軌道-」となった。当然であるが、素材の選定や手法は作者に委ねられる。また、それぞれの作者にはそれぞれの道筋を辿り素材に出会い、表現を模索する。この“それぞれの軌道”が各作者の“素材の在り方”を決定付ける。そして制作をするにあたり、作者自身でその素材を扱う目的や効果を分析し理解する必要がある。これは非常に重要なことと考えられる。この趣旨を4名の学生それぞれが解釈し持ち寄った出品作品からは様々なアプローチを発見でき、興味深い展覧会となった。

このテーマを東京芸術大学彫刻科教授の林武史氏に伝え大学院生2名の出品者を依頼し、趣旨に賛同し出品を希望する2名が選出された。

初日には出品者のみの座談会を行い、各出品者が展覧会テーマに即した内容の作品プレゼンをし、東京芸術大学彫刻科教授の大巻伸嗣氏と浜田にて講評

会を行った。

●DM「素材の在り方-それぞれの軌道-」



●会場風景



大巻伸嗣氏と浜田による講評



4. まとめ

5年間、計5回の展覧会で本学と芸大13名ずつ延べ26名の学生が参加した。本研究題目の「彫刻表現による素材の再考察」に則した各テーマは、その年度ごとの本学の参加者が議論を重ね決定している。このプロセスにおいて、皆が自身の素材に対する考えを出し合い決定しているが、これは自身の素材に対する再考察を行う機会であると共に他の参加者の素材に対する考えを知れることも自身の素材に対する考察を深化させることに大きく関わる結果となっている。素材の考察は作品制作において常に継続していく必要性があり、この研究において参加学生の素材に対する考察は深まっていると感じる。本学の学生のみならず芸大の参加学生にも同じような効果を期待したい。本研究の出展作品は、新型コロナウイルスのまん延により大学設備の使用が制限された年を除き、未発表作品と限定しているが、テーマを決定するまでの課程が制作に影響していることは大いに考えられる。

もうひとつ大きな要素として設置空間を意識した制作を指導している。両校のほとんどの参加学生が画廊空間での発表が始めてだということもあり、現地調査や図面の確認、過去の設置画像などを参考にし、自身の作品がこの空間にどう置かれ作品を成り立たせるかを考えることは非常に重要であり、今後の制作活動に生かせる大きな成果のひとつとなる。

こうして制作された作品を展覧会に向けて設置作業をするのだが、メール等である程度の情報交換はされているが、互いの作品を持ち寄り、初めて他の出品者の完成作品を見ることとなる。自身の作品をより生かすことの出来る設置を主張すると共に、ひとつの展覧会として良い展示にするため全体の空間を考える作業も必要となる。これは個展で空間を占有できる場合と大きく異なりグループ展ならではの難しい一面であるが、基本的に出品学生に委ね、特に困難が生じた場合を除き、私が指示する事は避けている。

●平成29年度「素材はいつ彫刻になるのか」展示作業



●令和元年「[石][金][土]—多様な素材の中で—」

展示作業



●「彫刻の形成—カタチとなる物質—」展示作業



勿論、ある程度の助言はしなければならないが、ここでの作業はこの研究の成果を得るもうひとつの大きな機会と考えている。学生主体で行うことで非常に大きな時間を要することとなるが、ひとつの展覧会をよりよくするために出品者同士で時間をかけ議論し展示することで、作品を制作するまでが最終目的ではないことを実感する機会になる。

また画廊空間での発表の際、重要な要素のひとつに「販売」が上げられる。状況によって違いはあるが、本研究の展覧会においては作者自身で価格設定を行っている。自身の作品の値段を決めるのであるが、作品の引き合いがあった際は、本展覧会では作

家7割、画廊3割の配分で支払われる取り決めとなっており、それを鑑みて設定することになる。ここでも希望があれば私の意見は伝えるが最終的に本人で設定する。画廊は作品を販売する場であることを実感する機会となっている。

このような過程を経て、1週間の展示を迎えるのだが、展示の初日にはギャラリートークや座談会を行い、それぞれ出品者がその年々のテーマを踏まえた作品解説をし、他の出品者や観覧者からの質問に答える場を設けている。(令和2年度及び3年度は新型コロナウイルスまん延防止対策のため無観客)この場では作者自身で作品コンセプト等を発表することになるが、ここでは言葉で伝えることの難しさと共に重要性を実感することになる。言語化することで様々なことにおいて再考察する余地があることの発見にも繋がる。

毎年の浜田による講評に加え、平成30年「素材に問う」及び、令和元年の『「石」「金」「土」-多様な素材の中で-』では、東京芸術大学彫刻科教授の林武史氏、令和3年「素材の在り方-それぞれの軌道-」では同教授の大巻伸嗣氏による講評も行われ、それぞれの大学にて行われている講評会とは違った意見をされる機会を得ることができ、出品者にとって貴重な経験となった。

また、会期中にはキュレーターやコレクターなど様々な来場者があり、作品を鑑賞してもらう機会であると共に出品者の在廊時には直接意見をもらえることも大きな経験になる。この機会より次回の発表の場を得た出品者も数名出しており今後の活動の可能性が広がることを期待できる結果のひとつとなっている。

●平成30年「素材に問う」ギャラリートーク風景



●令和元年『「石」「金」「土」-多様な素材の中で-』

ギャラリートーク風景



●林氏による講評会
第2回「素材に問う」



●第3回『「石」「金」「土」－多様な素材の中で－』



●大巻伸嗣氏・浜田による講評会
第5回「素材の在り方－それぞれの軌道－」



像や映像で何でも鑑賞できる時代であるが、実際の空間で実際の作品を鑑賞できる発表形態は今後も変わりなく行われていくだろう。本研究では画廊での発表に限定して研究してきたが、企画者や協力者、出品者や鑑賞者との関わりから得たものは大きな財産となり、ここでの経験を通して画廊に限らず様々な発表形態を模索し作品発表を続けいく上での大きな成果をあげたといえる。

謝辞

・本研究に賛同し協力いただいた東京芸術大学彫刻科及び、出品者を選抜し紹介いただいた、当時東京芸術大学大学彫刻科教授 木戸 修 先生（平成29年度）、東京芸術大学彫刻科教授 林 武史 先生（平成30～令和3年）両氏のご協力に感謝申し上げます。

・平成29年度～令和3年度まで計5回にわたり、展覧会会場を提供していただいている、現代美術画廊 GALERIE SOL様のご協力に感謝申し上げます。

附記

本論文は金沢美術工芸大学奨励研究（平成29年度～令和3年度）の成果の一部である。

（はまだ・しゅう 彫刻専攻／金属彫刻）
（2021年11月5日 受理）

4. おわりに

この様に、ひとつの展覧会を作り上げる過程を経験することは、学生が卒業（修了）後に作家として作品を発表する際のひとつの大きな経験となり、発表の場としての可能性を広げることに繋がる。今現在、インターネットの普及により検索サイトやSNS、動画サイトなどによる情報収集が当たり前になり画

